

# 序

理学療法士（PT）・作業療法士（OT）養成校の学生にとって、高次脳機能障害は理解するのが難しい障害だと思います。それは臨床に出たばかりのPT・OTにとっても同様かもしれません。理由は、複雑な脳構造・脳機能と結び付けて理解する必要があること、運動障害に比べて目に見えにくいこと、同じ障害名であっても患者によって症状が大きく異なること、個々の高次脳機能障害が明確に区分できず相互に関連すること、障害の定義や名称において研究者間の議論が続いていること、検査が大量にあること、検査結果と生活上の困りごとが必ずしも一致しないこと、などがあげられるかと思います。

本書は、このように理解するのが難しい高次脳機能障害、およびそのリハビリテーションについて、できるだけ平易に、かつ最新のエビデンスを意識しながら、その領域の第一線で活躍しているPT・OT・言語聴覚士（ST）の先生方に執筆いただきました。「1章 総論」、「2章 高次脳機能障害各論」を理解したうえで、「3章 高次脳機能障害のリハビリテーション」をお読みいただければ、そのリハビリテーション臨床におけるセラピストの方々の知恵や工夫がリアリティをもって理解いただけると思います。「4章 高次脳機能検査の実際」には、代表的な検査の解説を記載しました。他書と異なり、統合失調症の検査も記載してあります。

通常、高次脳機能障害の教科書は、脳卒中を中心として記載されています。しかし、脳卒中、認知症、内科系疾患、精神疾患、発達障害などできるだけ分けずに、「どの疾患による高次脳機能障害であっても、脳の機能障害による一症状である」との見方をすることが、PT・OTの高次脳機能障害への理解を深め、臨床の知見を豊かにするのではないかと、本書を編集するにあたり編者らは考えました。また、検査結果ばかりに目を向けるのではなく、日常の困りごとを中心に考えるのが、PT・OTの役割であるとも考えました。そこで50ページに記載した「日常の困りごとと高次脳機能障害・疾患の関連一覧」を作成してみました。この表はまだ、試験的作成段階です。読者の皆さまからご意見をいただき、さらに改良して、高次脳機能障害の臨床に携わるPT・OTがその全体像を理解することに寄与できたらと考えています。また、コース立方体組合せテストとHDS-Rの検査場面を動画にしました。このような動画は意外と少ないと思います。ぜひ、講義でご活用いただければ幸いです。

本書は、PT・OTがともに使用できる教科書として、また臨床に出たばかりのPT・OTにも役立つことを目的として新たにシリーズ化された「リハの流れが見える」シリーズの第1冊目となります。本書が学生や初学者にとっての高次脳機能障害リハビリテーションの流れの見える化に寄与できることを期待したいと思います。

最後になりますが、臨床や教育・研究でお忙しいなか、多くの時間を割いてご執筆いただいたPT・OT・STの皆さま、編者の気が付かないところまで詳細かつ丁寧にお世話くださった株式会社羊土社 増本奈津美様をはじめ編集部の皆さまに深謝いたします。

2023年9月

下田信明  
高杉 潤